

P19 民話にみられる陸水に対する日本人の意識

岩手大学農学部

○石橋 秀弘

杉本和嘉子

はじめに

溪流，河川を対象とする技術学として砂防工学や河川工学の体系が組立てられているが，これらは溪流，河川流域の荒廃防止，あるいは水利用効率の向上といった現場の技術的要求を背景に発達を遂げ，実際の事業遂行にあたって貴重な指針を与えてきている。

いっぽう人類と河川とは昔から深いつながりを持っており，流域住民が河川に対して持つ意識は物的生活面のみならず精神生活をも包含した広くて深い領域に及んでいる。したがってその感情を考慮しない砂防事業，河川事業は，たとえ技術的に完全でも，それだけで十分とは言い難い。

住民が河川，溪流に対して持つ意識は国により，時代により異なっている。その相違の実態と背景を明らかにすることは今後の事業の展開にとって必要であろう。今回はわが国の古い時代の一般民衆が河川を含む陸水に対して持っていた意識を民話の解析によって探ることとした。

1. 解析対象資料

解析の対象とした資料は瀬川拓男・松谷みよ子編集「日本の民話」全12巻 角川書店 1973～1974である。ここに収められている民話は①伝承者の話を翻字した資料（昔話），②伝承者の話を採集者が聞き書きした資料（昔話，伝説）が主体をなしている。年代的には明治以後，とくに昭和に入ってから採集資料が中心である。

民話は「民族の間で生まれ育ち，民族の生活感情を表しているそばくな説話」（角川国語辞典）であるから，これを分析して当時の一般民衆の意識構造を探るという作業手法は認められてよいであろう。

2. 解析方法

全12巻に収められている719話のうち，外国を舞台としたものを除いた713話を解析の対象とした。それぞれの話のなかに陸水（川，沢，淵，泉，湖，沼，池，滝）およびそれに付随した施設（橋，堰）のどれかが出現しているものを選び出し，これらの陸水に対して語り手がどのような意識を抱いていたか，換言すればその話を受け継いできた民衆が陸水にどのような評価を与えていたかを読みとることとした。

3. 結果と考察

3.1 陸水の出現頻度

それぞれの話のなかに陸水（施設を含む，以後同様）が出現しているのは総話数713話のうちの274

話、すなわち38%であった。またこの 274話の82%は川に関するものであった。これは日本では人の居住および活動の場が川のそばにあることが多いこと、またそのために川が心理の投影の場になることも多いためであろう。

また出現のしかたの地域性をみるため、民話の出所を全国8地方別にまとめ、それぞれの出現頻度を求めた。このほか、全国に流布しているものは「全国」と記載されていたから、これを含めると合計9ブロックにまとめられる。結果は図-1に示す通りである。9ブロック全体の平均値38%からみて、北海道における出現頻度71%は際立って大きい。民話にとりあげられていた時代の人間生活は、川からの産物（主として魚）に依存する度合いが、北海道では他地方にくらべて高かったことが読みとれたが、その帰結として精神的にも川に対する思い入れが他地方よりも強かったことを表わしているといえる。

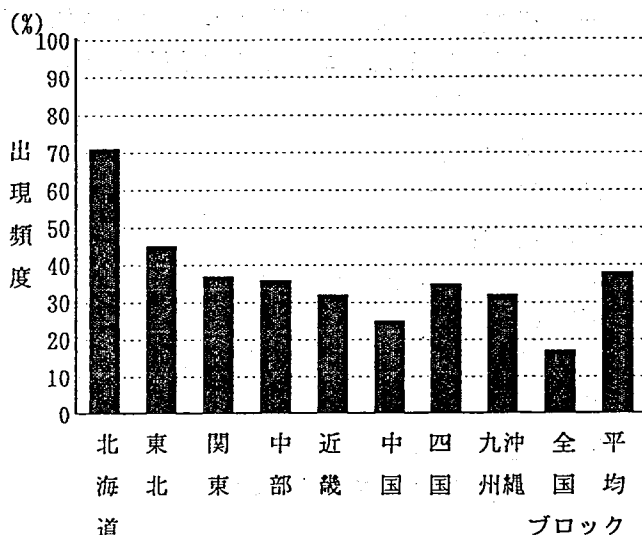


図-1 陸水の記載のある民話の出現頻度

3.2 陸水に対する評価

文意から陸水に対する評価を読み取り、それにコード番号を付して分類すると次ぎのようになった。

- 100 場所：話しの舞台となる場所、もしくはたんなる風景描写として出現したもの。
- 200 災害・恐怖
- 201 災害：洪水，土砂流発生の場合。
- 202 恐怖：事故により命を落す危険がある場所。
- 300 生活維持の場
- 301 水利用：生活用水，農業用水，水のエネルギー利用，水鏡。
- 302 利便：川のそばに住んで利便を得る。
- 303 産物：人間の生存・生活維持に必要な水中・水辺の動物・植物・鉱物が供給される。
- 304 恵み：水そのものが恵みであるが，さらに作物が育って恵みをもたらす。
- 305 生存の場：人間以外の生物の生存の場。
- 400 往来
- 401 分断：それを挟んでの往来ができない。物的もしくは精神的な境界線。
- 402 交流：対岸，上流，異世界との交流ができる。
- 403 通路：交通路としての機能。

- 500 流れの利用
- 501 流す：故意もしくは不注意で物を流してしまう。
- 502 流れてくる：有用，不要にかかわらず物が流れてくる。
- 503 情報伝達：流送物により上流の事情を知る。
- 600 水辺の利用
- 601 憩いの場
- 602 物思いの場
- 603 遊びの場
- 604 隠れ場，隠し場：危険から身を守るために隠れる。見つからないように物を隠す場所。
- 605 出会いの場
- 606 パフォーマンスの場：川原での勝負，芸事。
- 700 不思議・神秘の場
- 701 神性：神性が宿る場所。
- 702 清め：水がすべてを清めてくれる。
- 703 生命の根源：水によって生命が誕生する。
- 704 魔性：魔性が現れる場所。
- 705 主：主の住む場所。
- 800 土地造成：土砂堆積，干拓による土地造成。

(%)

274 話のそれぞれの主題を上分類の大項目別にまとめて出現頻度を計算すると図-2の通りであった。「生活維持」，「往来」，「災害」など，物的生活上の利便，困難にかかわる評価が多く出現しているのと並んで，「不思議・神秘の場」の出現頻度も高く，川が住民の精神生活に影響を及ぼしていることがうかがえる。

次にそれぞれの話の中で陸水を表わす単語の入った文章（これを要素文と呼ぶことにする）をとり出し，上の分類法に従って整理した。要素文の総数は 684 であったから，一つの話しの中には平均 2.5 の要素文が含まれていたことになる。要素文 684 の評価項目別出現頻度も先述の主題による整理結果と同傾向であった。

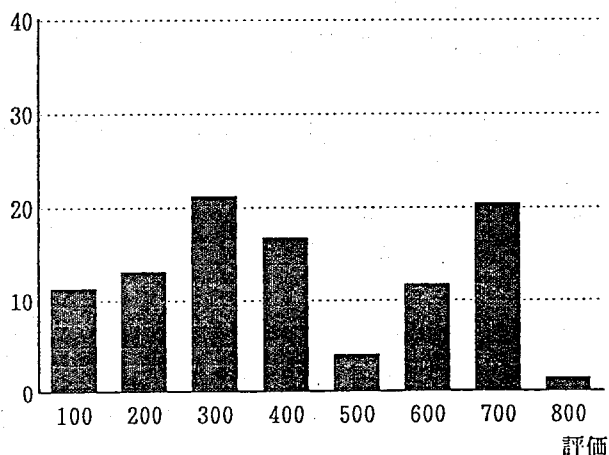


図-2 「評価」の出現頻度

3.3 水理条件に関する認識

684 の要素文の中の 132文には水理条件の描写がみられる。その表現事項を評価項目別に例示すると以下の通りである。

災害：水量，流水の破壊力，土砂輸送，流速

恐怖：水深，流水の運搬力，流速，水質

水利用：水量，清澄

産物：水量，含砂量

恵み：水量

分断：水量，流水の破壊力，水路幅，水深

3.4 民話の読みかえ

274 話のうちの41話には，日常生活に必要な知識や教訓を民話の形で伝承しようとした意図が読みとれる。代表的なものを示すと次ぎの通りである。

(a) 水辺でふざけたり，油断すると命にかかわる。

(b) 自然環境を破壊すると災害が起こる。

(c) 漁のマナーを教えるもの。

4. まとめ

民話の語られていた時代は，治水工事，砂防工事にもみるべきものはなく，したがって河川・溪流は原始状態を多くとどめていたであろう。その時代に生きた人々にとって川は，多くの恩恵を与えてくれる場所であると同時に，災害の発生するおぞましい場所でもあったであろう。さらにそれらの物的生活上の経験が積み重なって，川に対して，感謝と畏敬の念が醸成され精神生活にも影響を及ぼしていったものと思われる。